

日向薬事始め(その11) 一日向における蘭方医術の嚆矢者、岩切芳哲とその周辺—  
山本 郁男<sup>1,2</sup>, 宇佐見 則行<sup>3</sup>, 程 炳鈞<sup>1,2</sup>, 〇岸 信行<sup>2,4</sup>(<sup>1</sup>九州保福薬大,<sup>2</sup>九州保  
福大QOL研究機構,<sup>3</sup>奥羽大薬,<sup>4</sup>宮崎・日向・富高薬局)

【目的】日向における蘭方医術の嚆矢者は、シーボルト及びポンペ、ボードウィン等に師事した碓井元亮や丸田桃音らではなく、岩切芳哲とその弟子達であることが判明したので報告する。【結果及び考察】岩切芳哲を蘭医の嚆矢者としたのは松田仙峡(郷土史家)であり、その決め手となったのは岩切芳哲の碑文にある。これは延岡の医としてよりも歴史書「延陵世鑑」の著者として有名な白瀬永年の撰によるものである。この碑文には芳哲は延享4(1747)年、18歳の時、長崎の蘭医、榊林栄哲の下で研鑽を積み帰郷、当時の藩主、内藤政樹の大病を治癒せしめたことにより名声を得たとある。この術はこれまでの漢方医ではできないこと故この説が正しいといえる。最近、芳哲の家系が分かり、岩切家は岩切市右衛門とその妻、釋尻妙純(菊池家出)を祖として芳哲が生まれ、芳哲の養子孝哲もまた長崎に赴き榊林峽山に蘭学を修めている。したがって、日向における蘭医学の導入は1747年という説より約60年も前ということができる。これが後年、延岡において医学所、明道館の設立など医術界の進歩と隆盛を招き入れたと考えられる。父、市右衛門は当時の武将、土持氏に仕えていたが豊後の大友宗麟に攻められて破れ、伊福形に逃れ、3人の男子を得、その三男が芳哲である。芳哲には子がなかったので代々名医の家であった上述の白瀬家の永年の実弟、騏を養子とした。この弟は後に岩切孝哲と称し、蘭医となっている。この孝哲が松田仙峡が指摘するまで嚆矢者となっていたことは名前が芳哲と孝哲、また長崎での師が榊林流外科と紛らわしかった為ではないかと考えられる。芳哲は寛政12(1800)年、71歳で没す。墓は延岡市伊福形一ヶ岡墓地にある。【文献】山本郁男他、日本薬史学会2008年会(金沢)講演要旨集、p-28(2008)。